ＮＯ．３１３

じゅんあい

平成２５年（２０１３）４月１日

高 山 右 近 物 語

右近像　（米　治一作）

高山右近はキリシタンの柱石（ちゅうせき）として人々から尊敬され、その信仰はすべてのキリシタンの手本とされる程であった。その名声は国内ばかりでなく国外にまで轟（とどろ）いたと言っても過言（かごん）ではない。

その陰に父・高山飛騨守の回心があったことを見逃すことは出来ない。飛騨守は熱心な日蓮宗の信奉者で、何とかしてキリシタンの教えを根絶させようと思い、結城山城守、清原枝賢と力を合わせイルマン・ロレンソよりキリシタンの教えを聞き、その欠点を見つけ出し根底より覆えそうと計画した。が、しかし一つとして落ち度はなく、かえって大いに感銘を受け、宣教師ヴィレラから洗礼を受けて“ダリオ”との洗礼名を頂戴した。

そして、奈良の沢城へ移封の折、この教えとその喜びを自分のみならず家族や家臣団一同にも分かち合いたいとロレンソを招き、その教えを語ってもらった。右近はその時１２才で彦五郎と呼ばれていた。キリシタンの教えを受け入れロレンソより洗礼を受け、“ジュスト”との洗礼名を拝した。ジュストとは正義・義人との意味である。

このようにして若き彦五郎は霊界に産声をあげキリシタンの仲間入りをしたのである。そして、やがて日本で最も有名なキリシタンの柱石、キリシタンの大旦那高山右近へと成長するのであった。

芥川城にいた時に高槻城主であった和田惟長の悪しき計略を見破り、お互いに刀を抜いて組討となりそれぞれ重傷となり惟長は絶命、右近はかろうじて一命を取りとめた。たとえ惟長がどんなに悪辣な手を使おうとも、主の御前に悩み苦しむ右近であったであろう。そして、その魂を主に向け痛悔の涙に暮れたに違いない。魂の浄化をこの時ほど味わった事はないであろう。

「主よ、私を洗って下さい。私を清めて下さい。」（旧約聖書　詩編５１篇）と右近の魂よりの祈りが聞こえてくるようである。キリストより寸時も離れてはならない事をいやと言うほど思い知らされたことだろう。

「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。
人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、
その人は豊かに実を結ぶ。
わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。
父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。
わたしの愛にとどまりなさい。」　（新約聖書　ヨハネ福音書　１５章）

こうして、惟長に代わり高山右近が高槻二万石の城主となった。高槻城主右近の誕生である。２１才であった。

しかし、さらに試練は続き、荒木村重の謀反のため父飛騨守は村重方につき、織田信長からの圧力もあり右近は苦悩する。右近が村重方につけば信長は教会を破壊しキリシタンを弾圧するであろう。信長方につけば父の命の保証はなく人質として出した妹と長男の命の保証もない・・・。

結局右近は城を捨て城主の座より降り髷を切り“一人の人右近”となって信長の前に姿を現す。家臣達は自ら判断し信長に打降した。

戦わずして城が手に入った事を信長は喜び、右近を優遇し二万石加増して高槻を四万石とした。

一方の村重は右近の心を悟り、人質を処刑することはなかった。信長も父飛騨守を殺さず柴田勝家のもと越前北の庄預けとした。その為か越前にもキリシタンが誕生していく。

「それから（イエスは）弟子たちに言われた。『わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。
自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。
人はたとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払いえようか。』」
（新約聖書　マタイ福音書　１６章）との御言葉が心に迫る。

ある日の事、聖と呼ばれた身寄りのない人が亡くなり誰も見向こうともしなかった。その折、父飛騨守と右近はこの人を丁重に弔い棺に入れ墓へ向かおうとした。すると家臣達がそれを見て反省し各々スコップを手にして埋葬したという。
近年に至るまで「うちのお殿様はよいお殿様」との右近評が高槻では言われていたという。

ミゼル・コルジア（慈悲の家）と呼ばれるメンバーの一員であった右近父子は福祉の先駆者とも言えよう。
高槻では何と領民の７割がキリシタンになったという。キリシタン大名高山右近の名声が全国に轟いたのはこの頃であった。

大正時代に千提寺と言う山奥の数件の民家から右近時代のキリシタンの遺品遺物が続々と発見された。その後キリシタンの資料館が建てられるに至った。

１２年間にわたる高槻時代ではあったが、その後、右近は豊臣秀吉の命で隣の播磨の国明石へと移封となった。
九州攻めの命が下り右近は秀吉のもと十字旗をかざし甚だしい戦果をあげ九州は平定された。

しかし、１５８７年突如秀吉は九州の筑前博多において“バテレン追放令”を発令し、右近にはキリシタンをやめよと激しく迫った。右近は信仰を選び、一夜にして明石六万石の知行を失った。
小西行長の所領である小豆島などで転々流謫の生活を２年間送った。その折京都より宣教師オルガンチーノが右近に会いに小豆島を訪れたが右近は一修道者の如く喜びと平和にみちた姿をしていたというのである。「さすが、あっぱれ！」とオルガンチーノは喜びの心で小豆島を後にしたという。

１５８８年京都の伏見で加賀の国の城主前田利家と奇しき出会いをする「金沢に来るがよい三万石程提供しよう」右近は答えていった。「禄は少なくてもよい、せめて南蛮寺一ヶ寺でも建てて下さるなら参ろう。」

かくして右近は３６才にして利家に招かれ加賀の国金沢へと身を寄せる。戦術家として築城家としてさらに茶人として、加賀百万石の礎を築く上で貢献するのであった。

しかし、１６１４年徳川幕府より発せられし“大禁教令”により金沢をも追われゆく右近。ナデシコの２種の歌を残し、金沢を後にする。
６２才であった。

＊　草枯れの　間垣に残る撫子を
　　別れし秋の　　形見ともみよ

＊　おろかなる　老いの涙のうすければ
　　夕日のかげの　大和なでしこ

雪深き木の芽峠を先頭に立って進みゆく右近。妻ジュスタ、娘ルチア、孫五人、内藤如庵らが続いた。

坂本、京都、大阪、長崎へ。２６名の日本最初の殉教の地である長崎の西坂の丘、右近はどのような思いでその地に滞在したのだろうか・・・。言葉がなく・・・ただ呻き・・・涙し・・・叫び、祈った事だろう。
長崎から３５０名のキリシタン達がアコスタ所有の船にすし詰めにされて乗せられ一路ルソンへ・・・。

「子羊が第五の封印を開いたとき、神の言葉と自分たちがたてた証しのために殺された人々の魂を、わたしは祭壇の下に見た。
彼らは大声でこう叫んだ。
『真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさらないのですか。』
すると、その一人一人に、白い衣が与えられ、また、自分たちと同じように殺されようとしている兄弟であり、仲間の僕である者たちの数が満ちるまで、なお、しばらく静かに待つようと告げられた。」

（新約聖書　ヨハネの黙示録　６章）

右近は血を流しての殉教者ではなかったが精神的には日々、時々刻々殉教の心を忘れなかった。ここに右近の右近たる所以、大きな魅力があることを忘れることは出来ない。

マニラでは総督シルバの歓迎を受け「スペイン国王に生活の援助をしてもらえるように申請しましょう」と申し出があったが「私は御主イエスが殉教をもお許しにならなかった程の拙き僕ですから・・・」と丁重に辞したという。

そしてマニラ到着後４０日にして右近は熱病のため天に召された。
総督シルバは右近を聖人・殉教者として彼の葬儀を「右近は好まないだろうがわたしが右近をいかに尊敬しているかをこの様な形で表現したい。」と国王級に執り行った。マニラ中悲しみにくれ、人々は右近との別れを惜しんだ。

日本よりの偉人ここに眠る。右近の遺骸はマニラ最大のゼズス会聖アナ教会の祭壇の傍らに埋葬された。

高山右近（１５５２年～１６１５年）　キリシタン大名。教派・教団を超えて信仰の模範を世界に示して多くの人々から尊敬されている。
現在福者への認定を求める運動がなされている。
２０１５年に没後４００年を迎える。

殉愛キリスト教会　　牧師　：　山　縣　　實
〒920-0814　石川県金沢市鳴和町タ 210　Tel・Fax 076－251－2247
E-mail　: jun-i-yamagata@ishikawa.email.ne.jp
ＵＲＬ　: http://www.ne.jp/asahi/jun-ai/christ-church/